

スラブ・ユーラシア地域における東洋伝統演劇の受容と表象に関する研究 成果報告

研究代表者：上田洋子

本研究はスラブ・ユーラシア地域への東洋伝統演劇の進出とそれをめぐるメディアについて考察するものである。これまで行ってきた 1928 年の歌舞伎ソ連公演をめぐる状況やメディアに関する研究をより深めるとともに、日本演劇、中国演劇の専門家とともに、東洋演劇のスラブ・ユーラシア地域における受容史を研究するとともに、東洋演劇がこの地域においてどのように表彰されてきたのかを探る試みでもある。

まずは 2013 年 7 月 6 日に東京で研究会を行い、ロシア語圏とアジア圏の演劇交流に関してどのような研究が可能か、発表および討論を行った。また、8 月 29-31 日には研究チームの全員で北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、北海道大学図書館、札幌大学図書館にて、日本とロシア語圏、あるいはアジアとロシア語圏の演劇交流関連資料、およびソ連・ロシアの表象・ジャーナリズム史に関する資料の調査を行った。

上田が担当した 1928 年歌舞伎ソ連公演の新聞・雑誌における表象の分析に関しては、北海道大学で文献調査、および早稲田大学での同時代の新聞の調査を行った。ソ連ジャーナリズム形成に関する研究はあまりなく、今後も調査を続ける必要がある。また、これまで切り抜きで見ていた新聞・雑誌記事を紙面で見ることで、時事的文脈においてこの事業の新たな意味付けが可能となった。上田の研究成果は、論集『歌舞伎と革命ロシア —市川左團次一座の 1928 年ソ連公演』（仮題、森話社「メディアとパフォーマンスの 20 世紀」シリーズ）に発表予定である。2013 年度の刊行を予定していたが、2014 年度に変更になった。

研究チームの成員の成果

内田健介

1928 年の歌舞伎訪ソ公演の際、ソヴィエトの聴衆に多くの知識を提供した日本学者のコンラードは、ソ連で歌舞伎公演が行われる意義について、ヨーロッパのようなエキゾチズムによる受容ではなく、ソヴィエトは日本の文化である本物の伝統演劇歌舞伎を正しく受容することを強調した。実際に歌舞伎訪ソ公演の際の批評を見ても、日本文化を異質なものとして、物珍しいものとして扱い商業的に扱ったヨーロッパでのジャポニスムにたいし、ソヴィエトの歌舞伎受容は学術的な研究を基礎に置いたものとなっている。こうした学術的な受容は 1928 年以前にメイエルホリドによって、日本演劇を一つの新しい技術として、歌舞伎や能が持つ条件性を舞台に取り込まれた事象があり、こう

した日本演劇の学術的な受容はソヴィエトで既につちかわれていたことがわかる。

こうした背景をふまえて、夏の研究会において内田からは、ロシアでの日本演劇の受容の特色を考えるために、ロシア以外のヨーロッパ諸国におけるジャポニズムの流れについて、19世紀から20世紀初頭にかけて先行研究を用いながら概括した。そして、北海道大学での調査の中でロシア・ソヴィエトの新聞や書籍で日本に関して扱われた記事や解説の書誌を閲覧することができたことで、日本演劇がいかにしてロシア国内の新聞・雑誌、そして学術的に扱われてきたのか知ることができた。そうした中でドイツの演劇学者カール・ハーゲマンによる日本演劇の紹介が重要な意味を持っていると考えられる。しかし、他の雑誌や新聞記事などで日本では入手不可能なものも多いため、ロシアでの調査を行うことが今後の課題として残されている。

中尾薫

能との比較においては、2013年8月10日開催の当該プロジェクト研究会にて口頭報告した「能楽の受容をめぐって」（中尾薫）を基礎として、さらに調査分析をすすめたのが、以下の成果である。玄人能役者による本格的な海外公演としては1905（明治38）年の観世宗家一向による大漢帝国・ソウル公演がある。ただし、この公演は京城釜山間の鉄道落成開業式典へ招聘されたもので、歌舞伎ソ連公演が異なる表象システムを持つ演劇への芸術的興味があったような、東洋演劇としての能の特徴を鑑賞・共有する目的は皆無であった。その背景には、明治38年前後に、ようやく世界の演劇と能との比較研究が始まり、能の特異性を日本人が認識し始め、海外へのアピール点への認識が乏しかったことがあるが、この結論を踏まえれば、歌舞伎ソ連公演において、歌舞伎がどのようにその特異性をアピールしていたのか、1928年歌舞伎ソ連公演記などから読み解く必要がある。

鈴木直子

中国とソ連との演劇における相互影響をテーマに、出張では『民国時期中蘇関係』（田保国、済南出版社、1999年）を中心に主に演劇交流史方面の調査を行った。ソ連側では1920年代に京劇俳優である梅蘭芳の公演の様子が報道され、1935年には梅蘭芳が対外文化協会の招聘により訪ソ公演を果たした。この訪ソ公演を実現させた対外文化協会については、その成立や招聘公演の経緯について調査を進めており、梅蘭芳訪ソ公演に関する文献リストの作成も継続中である。調査結果は今年度中に文献リストも含めて論文として発表するつもりである。